

『万葉集』巻六の構想 ― 巻末部の役割 ―

市瀬 雅之

はじめに

『万葉集』二十巻に収められている歌は、個別の状況の中に詠まれている。巻として編まれる際、編集の志向に基づいて選ばれ、緩やかに配列された。その志向をもっともよく表している箇所として巻頭歌や巻末歌をあげることができる⁽¹⁾。

例えば巻六(以下「当該巻」と称す)の場合⁽²⁾、巻頭に、

養老七年癸亥夏五月、幸于芳野離宮時、笠朝臣金村作歌一首并短歌

(6・九〇七〜〇九)

と記される吉野讃歌は、天武皇統を正當に継承する者として、聖武天皇の即位を示唆する⁽³⁾。以下は概ね時間軸に従い、聖武朝を多様な歌で表し華やかに讃えている。作歌年次が明記されている箇所留意すると、天平十六年(七四四)一月に詠まれた、

同月十一日登活道岡集一株松下飲歌二首 (6・一〇四二〜四三)

の選定等に、安積皇子への愛惜が含まれる⁽⁴⁾。

「含まれる」としたのは、当該巻がこれを巻末歌としていないためである。以後も、

① 傷惜寧樂京荒墟作歌三首 作者不審 (6・一〇四四〜四六)

② 悲寧樂故郷作歌一首 并短歌 (6・一〇四七〜四九)

③ 讚久邇新京歌二首 并短歌 (6・一〇五〇〜五八)

④ 春日悲傷三香原荒墟作歌一首 并短歌 (6・一〇五九〜六一)

⑤ 難波宮作歌一首 并短歌 (6・一〇六二〜六四)

⑥ 過敏馬浦時作歌一首 并短歌 (6・一〇六五〜六七)

右二十一首、田辺福麻呂之歌集中出也。

が記されている(以下、「巻末部」と称す)。

巻末部に関する近年の研究では、村瀬憲夫「万葉集巻六末部の編纂と大伴家持」⁽⁵⁾に、

いま私たちの前に残されている巻六巻末部の現況を分析することによって、「うつろひの無常の自覚」と「をちかへりと永遠への願い」こそ、家持を巻六の巻末部の編にかり立てた原動力であった。

とある。当該巻の編集者に大伴家持を捉えることは可能であろう⁽⁶⁾。遷都に関わる歌に「うつろひの無常の自覚」と「をちかへりと永遠への願い」を見いだすこともできよう。ただし、遷都に直接関わらない⁽⁶⁾については言及が認められない。示された読み方を、巻六全体に遡及させることも難しい。更なる検討が求められる。

松田聡「万葉集巻六と天平十六年 ― 末四巻を視野に ―」⁽⁷⁾は、

本稿としては、巻六巻末部における宮廷関係歌が、平城京から久遠京を経て難波宮に至る遷都の歴史を、主に橘諸兄の視点から語りつつ、天平十六年閏正月の難波宮行幸に関わる歌で終わっているということを確認しておきたい。巻六巻末部は、一方では繰り返される遷都による宮都の盛衰といったことに目を向けながら、最終的には天平十六年

春の難波宮に焦点を絞り、諸兄を政権の首班とする聖武治世を讃美するという形で宮都歌の結びとしているのである。そこには天平十六年という時代の一面が鮮やかに切り取られているとすべきだろう。

と論じる。巻末部が「橘諸兄の視点」、或いは「諸兄を政権の首班とする」

ことまでを表現し得ているかどうかはともかく、「聖武治世を讚美するという形で宮都歌の結びとしているのである」との見方は、巻頭歌（6・九〇七〜〇九）に見出された志向と呼応する。ここに一卷の構想を認めることができよう⁽⁸⁾。ただし議論は、末尾の歌（6・一〇六五〜六七）にまで及んでいない。

市瀬雅之「卷六の場合」⁽⁹⁾は、⑥について、

敏馬浦を「語り継ぎ 偲ひけらしき」或いは「百代経て 偲はえ行かむ」と讚美するためには、それが可能な時代の継続が求められる。それは聖武に象徴される天皇を中心とした社会の永遠を願うことであり、当該歌の「長くとそ思ふ」との心情に通じている。と記し、二十巻の中に当該巻を、

（前略）卷一や卷二が予感させた「寧楽宮」は、卷六にひとまず天平十六年までが時間軸に沿って表されている。（中略）そこに表された歌世界を、ひとまず「寧楽宮の歌世界前期」（中略）と呼称しておく。その先は、卷六の末尾二十四首卷十七の冒頭三十二首が重ね合わせられることで、卷十七が示す天平十八年（七四六）以後が、「寧楽宮の歌世界後期」（中略）とも呼ぶべき歌世界を表現している（後略）。と見通したことがある。ただし、卷末部への具体的な言及に乏しい。

本稿では、当該巻末部を読み通すことで、当該巻の中にその在り方を考察する。末尾に置かれた「敏馬の浦に過る時に作る歌一首 并せて短歌」（6・一〇六二〜六四）が、当該巻に果たす役割を考える。あわせて二十巻を俯瞰する中にもその役割を確認しておく。

一、時代の節目として顧みられる久邇京遷都

当該巻末部は、次の歌をもってはじまる。

① 奈良の京の荒墟を傷み惜しみて作る歌三首 作者審らかならず

紅に深く染みにし心かも奈良の都に年の経ぬべき （6・一〇四四）
世の中を常なきものと今そ知る奈良の都のうつろふ見れば （6・一〇四五）

石つなのまたをち返りあをによし奈良の都をまたも見むかも （6・一〇四六）

題詞の「奈良の京の荒墟」は天平十二年（七四〇）末に、都が久邇京に遷されたことによる。遷都に先立ち、旧都となる平城京が「傷み惜」まれ詠まれている。

一首目は、紅が深く染まるように、奈良の都に長く住み続けるべき心持ちが表されている。しかし二首目で、世の中は無常なものだと今こそ知ったと、奈良の都が遷されるのを目にする。三首目では、石つなのように再生した、美しい奈良の都をまた見ることができるとかと思いを寄せている。三首に加えて次の歌も、題詞が平城京を「故郷」と呼び悲しむ。

② 奈良の故郷を悲しびて作る歌一首 并せて短歌

やすみしし 我が大君の 高敷かす 大和の国は 天皇の 神の御代
より 敷きませる 国にしあれば 生れまさむ 皇子の継ぎ継ぎ 天
の下 知らしまさむと 八百万 千年をかねて 定めけむ 奈良の都
は かぎろひの 春にしなれば 春日山 三笠の野辺に 桜花 木の
暗隠り かほ鳥は 間なくしば鳴く 露霜の 秋さり来れば 生駒山
飛火が岡に 萩の枝を しがらみ散らし さ雄鹿は 妻呼びとよむ
山見れば 山も見が欲し 里見れば 里も住み良し もののふの 八
十伴の緒の うちはへて 思へりしくは 天地の 寄り合ひの極み
万代に 栄え行かむと 思へりし 大宮すらを 頼めりし 奈良の都
を 新た世の 事にしあれば 大君の 引きのまにまに 春花の う
つろひ変はり 群鳥の 朝立ち行けば さす竹の 大宮人の 踏み平
し 通ひし道は 馬も行かず 人も行かねば 荒れにけるかも

反歌二首

立ち変はり古き都となりぬれば道の芝草長く生ひにけり

(6・一〇四七)

なつきにし奈良の都の荒れ行けば出で立つごとくに嘆きし増さる

(6・一〇四八)

(6・一〇四九)

長歌では、天皇が治めてきた大和の国に、皇祖の御代から長く治められてきた歴史が顧みられる。都の情趣が、春は春日山や御笠の野辺に咲く桜の花とともに、貌鳥のにぎやかな鳴き声によって表される。秋は生駒山の飛火が岳で、萩の枝に葉を散らして、雄鹿が妻を呼ぶ鳴き声によって表現される。山も見飽きることがなく、里も住みよいと讃えられる。万代に栄え続けてゆくことが願われた大宮があり、頼りにしていた都のはずであった。しかし、新しい御代にふさわしく、大君が遷都するままに移ろい行く、道が荒れてゆくことが惜しまれている。第一反歌でも、古都となつてしまったので、道の雑草も長く生い茂ってしまったことが繰り返して惜しまれる。第二反歌では、都が荒れて行くのを見るたびに嘆かれる思いが増してゆくことを強調する。旧都への哀惜の情が表現されている。これらを受けて、遷都された久邇京が長歌二首をもって讃えられる。

③ 久邇の新京を讃むる歌二首 并せて短歌

現つ神 我が大君の 天の下 八島の中に 国はしも 多くあれども
 里はしも さはにあれども 山並の 宜しき国と 川並の 立ち合ふ
 里と 山背の 鹿脊山の際に 宮柱 太敷きまつり 高知らす 布当
 の宮は 川近み 瀬の音ぞ清き 山近み 鳥が音とよむ 秋されば
 山もどろに さ雄鹿は 妻呼びとよめ 春されば 岡辺もしじに
 巖には 花咲きををり あなおもしろ 布当の原 いと貴 大宮所
 うべしこそ 我が大君は 君ながら 聞かしたまひて さす竹の 大
 宮こと 定めけらしも (6・一〇五〇)

反歌二首

三香原布当の野辺を清みこそ大宮所へ一に云ふ、「ここと標刺し」定
 めけらしも (6・一〇五一)

山高く川の瀬清し百代まで神しみ行かむ大宮所 (6・一〇五二)

我が大君 神の尊の 高知らす 布当の宮は 百木茂り 山は木高し
 落ち激つ 瀬の音も清し うぐひすの 来鳴く春へは 巖には 山下
 光り 錦なす 花咲きををり さ雄鹿の 妻呼ぶ秋は 天霧らふし
 ぐれを疾み さにつらふ 黄葉散りつつ 八千年に 生れつかしつ
 天の下 知らしめさむと 百代にも 変はるましじき 大宮所
 反歌五首 (6・一〇五三)

泉川行く瀬の水の絶えはこそ大宮所うつろひ行かめ (6・一〇五四)
 布当山山並見れば百代にも変はるましじき大宮所 (6・一〇五五)
 娘子らが績麻掛くといふ鹿脊の山時し行ければ都となりぬ (6・一〇五六)

鹿脊の山木立を繁み朝去らず来鳴きとよもすうぐひすの声 (6・一〇五七)
 狛山に鳴くほととぎす泉川渡りを遠みここに通はずへ一に云ふ、「渡り
 遠みか 通はざるらむ」 (6・一〇五八)

第一長歌は、大君が治める大八島の中に、山の並びの良い国で、川筋の寄り合う里として選ばれ、山背の鹿背の山のほとりに建てられた布当の宮は、川の瀬音が清らかであり、山が近いので鳥の声が響くと讃えられる。秋になると山もどろくばかりに雄鹿が妻を呼び、春になると岡辺に花が咲き乱れる地と表される。立派で尊い大宮は、大君が臣下の言葉によしと聞かれて定められた経緯が示される。その第一反歌は、三香の原の布当の野辺が清らかなことによるのだらうと、選ばれた理由が思い遣られる。第

二反歌は山が高く川の瀬も清いので、百代まで神々しく栄えてゆくであろうと、大宮所が讃えられる。

第二長歌はこれらを受けて、大君の治める布当の宮にはたくさんの木が茂り、山は小高い。落ちて激しく流れる川の瀬音も清いと、選ばれた土地の特徴が改めて確認される。第一長歌が秋から詠みはじめられたのに対し、うぐいすが来て鳴く春の巖には、山裾が光るほどに、錦のように花が咲き乱れる様子が表現される。雄鹿が妻を呼ぶ秋は、天がかき曇ってしぐれが激しく降るので、赤く色づいた木の葉が散り続けている景が示される。幾千年の後々まで天皇が御代を重ねて天下を治められるだろうと期待し、大宮所が百代の後まで変わることを予祝する。第一反歌は、泉川に流れる川瀬の水が絶えたならこそ、大宮所はさびれてゆこうと詠むが、第二反歌で布当山の山並みが、百代にも変わることなどないはずの大宮所であることを保証する。第三反歌では、かつては娘子たちが績麻を掛ける柿の名を持つ鹿背山も、時が移ることで都となったと、今の繁栄が讃えられる。第四反歌では、鹿背山の木立ちが茂り、朝ごとに來ては鳴き賑わううぐいすの声に、繁栄が強調される。第五反歌では、狛山に鳴くほととぎすは、泉川の渡し場が遠いのでこままでは通って来ないと、その到来が羨望されて閉じられている。

末尾部以前には、遷都直前に行われた関東行幸が、

十二年庚辰の冬十月、大宰少貳藤原朝臣広嗣が謀反せむとして兇軍するに依りて伊勢国に幸せる時に、河口の行宮にして内舍人大伴宿禰家

持が作る歌一首 (6・1029)

天皇の御製歌一首 (6・1030)

右の一首、今案ふるに、吾の松原は三重郡にあり、河口の行宮を相去ること遠し。けだし、朝明の行宮に御在す時に製らす御歌なるを、伝ふる者誤れるか。

丹比屋主真人の歌一首 (6・1031)

右、案ふるに、この歌はこの行の作にあらじか。然言ふ所以は、大夫に勅して河口の行宮より京に還し、從駕せしむることなし。いかにしてか思泥の崎にして作る歌を詠ずることあらむ。

狭残の行宮にして、大伴宿禰家持が作る歌二首 (6・1032、1033)
美濃国の多芸の行宮にして、大伴宿禰東人の作る歌一首

(6・1034)

大伴宿禰家持が作る歌一首 (6・1035)

不破の行宮にして、大伴宿禰家持が作る歌一首 (6・1036)

と記されているが、遷都に関わる歌は認められない。久邇京への讚歌は、十五年癸未の秋八月十六日に、内舍人大伴宿禰家持が久邇の京を讚めて作る歌一首 (6・1037)

と、天平十五年(743)の作を待たねばならない(10)。

『万葉集』に記された歌は、先に編まれた箇所を尊重する傾向がある。書き継ぐ場合に時間を少し戻し、重ね合わせるように歌を記し続けてゆくところに編集の大きな特徴が認められる(11)。当該巻の末尾部にあつて①③は、久邇京への遷都が聖武朝の大きな節目であったことを示している。旧都となった平城京に哀惜の情を捧げ、久邇の新京が讃えられた歌を配置することで回顧されている。

同様の傾向は、卷十七の冒頭三十二首にも見出すことができる。天平二年(730)まで遡り表される中に、

讚三香原新都歌一首 并短歌 (17・3907、8)

右天平十三年二月右馬頭境部宿禰老麻呂作也

詠霍公鳥歌二首 (17・3909、10)

右四月二日大伴宿禰書持從奈良宅贈兄家持

橙橘初咲霍公鳥飜嚶 對此時候詎不暢志 因作三首短歌以散鬱結之緒

耳

(17・三九二―三三)

右四月三日内舎人大伴宿祢家持従久迩京報送弟書持

と含まれる。巻が編まれる中に、久邇京遷都に関わる歌は、聖武朝を振り返る装置として機能している。

二、継続する難波宮への讃歌

新たな時代の到来が期された久邇京にも、遷り行くことが惜しまれる時が来る。

④ 春の日に、三香原の荒墟を悲傷して作る歌一首并せて短歌

三香原 久邇の都は 山高み 川の瀬清み 住み良しと 人は言へども あり良しと 我は思へど 古りにし 里にしあれば 国見れども 人も通はず 里見れば 家も荒れたり はしけやし かくありけるか 三諸つく 鹿脊山のまに 咲く花の 色めづらしく 百鳥の 声なつかしき ありが欲し 住み良き里の 荒るらく惜しも(6・一〇五九)

反歌二首

三香原久邇の都は荒れにけり大宮人の移ろひぬれば (6・一〇六〇)
咲く花の色は変はらずももしきの大宮人ぞ立ち変はりける (6・一〇六一)

題詞に「三香原の荒墟を悲しび傷みて作る」とあるので、遷都された様子がうかがわれる。長歌に、三香原の久邇の都は、山が高く川の瀬も清いので、住みよいと人は言うけれど、居やすいと私は思うけれど、古びた里になってしまったので、国を見ても人の往来もなく、里を見ても家も荒れていると嘆息される。神の鎮座する鹿背山の辺に咲く花の色はずばらしく、百鳥の声も懐かしく、いつまでも居たい住みよい里と讃えられるが、荒れてゆくのが惜しまれている。第一反歌は、三香原の久邇の都が荒れてしまった。その理由を、大宮人が移り去って行ってしまったためと詠む。第二

反歌は、咲く花の色が変わらないのに、大宮人たちの様子は変わってしまったことを嘆いている。

この歌が詠まれた時期なのだが、天平十六年(七四四)の難波宮遷都時に比定すると、『続日本紀』が二月二十六日の記事として記す次の勅と抵触する。

庚申、左大臣勅を宣りて云はく、「今、難波宮を以て定めて皇都とす。

この状を知り京戸の百姓意の任に往来すべし」とのりたまふ。

難波京を皇都としながら、久邇京との往来が自由に認められている。それ以前の遷都にはなかった特徴が認められる。難波京には、久邇京と並び立つ皇都の役割が与えられていることが注目されよう。久邇京の廃都には、『続日本紀』天平十七年(七四五)九月二十五日条に、

己卯、車駕、平城に還りたまふ。是の夕、宮池駅に宿りたまふ。

とあり、二十六日条に

庚辰、平城宮に至りたまふ。

と記された平城京への還幸を捉えるべきであろう⁽¹²⁾。

では、次に記される歌には、更に後の作歌を考えるべき⁽¹³⁾かと問われると、少し立ち止まっておく必要がある。

⑤ 難波宮にして作る歌一首 并せて短歌

やすみしし 我が大君の あり通ふ 難波の宮は いさなとり 海片 付きて 玉拾ふ 浜辺を近み 朝はふる 波の音騒き 夕なぎに 梶の音聞こゆ 暁の 寢覚に聞けば いくりの 潮干のむた 浦渚には 千鳥妻呼び 葦辺には 鶴が音とよむ 見る人の 語りにすれば 聞く人の 見まく欲りする 御食向かふ 味経の宮は 見れど飽かぬかも (6・一〇六二)

反歌二首

あり通ふ難波の宮は海近み海人娘子らが乗れる船見ゆ(6・一〇六三)

潮干れば葦辺に騒ぐ白鶴の妻呼ぶ声は宮もとどろに (6・106四)

長歌には、大君が「あり通ふ 難波の宮は」と表現されていることが留意される。海に接しており、玉を拾う浜辺が近いので、朝寄せる波の音がざわめき、夕なぎに船を漕ぐ梶の音が聞こえるという。明け方の寝覚めには、浦の干潟に千鳥が妻を呼び、葦辺には鶴の鳴き立てている声が聞こえる。見る人が語りぐさにしよとすると味経の宮は、見ても飽きることがないと讃えられている。第一反歌にも、難波の宮は「あり通ふ」所とされている。海が近いので、海人の娘子たちの乗っている船が見えることが詠み加えられている。第二反歌には、潮が引くと葦辺で鳴き騒ぐ白鶴の妻を呼ぶ声が、大宮に響き渡るほどにぎやかであると讃えられている。

長歌末尾の「味経の宮」に着目すると、当該巻の中に神亀二年(七二五)の作として、次の歌が想起される。

冬十月、難波宮に幸す時に、笠朝臣金村が作る歌一首并せて短歌
おし照る 難波の国は 葦垣の 古りにし里と 人皆の 思ひやすみ
て つれもなく ありし間に 続麻なす 長柄の宮に 真木柱 太高
敷きて 食す国を 治めたまへば 沖つ鳥 味経の原に もののふの
八十伴の男は 廬りして 都なしたり 旅にはあれども

反歌二首 (6・九二八)

荒野らに里はあれども大君の敷きます時は都となりぬ (6・九二九)

海人娘子棚なし小舟漕ぎ出らし旅の宿りに梶の音聞こゆ (6・九三〇)

長歌では、難波の国が古びた里だと人々が軽んじる中で、大君は長柄の宮に立派な柱を太く高く立て、食す国と治めらるので、味経の原に大勢の官人立ちが宿泊して都となった。旅の間だけではあるけれども詠まれている。「味経」は「原」であり、まだ「宮」と表現されていない。第一反歌には、荒野に里はあるのだが、大君が行幸する時は都と成ることが繰り返し詠まれ、讃美されている。第二反歌では、海人おとめが棚なし小舟

を漕ぎ出して行く梶の音に、生業の豊かさが予祝されている。「旅にはあれども」(6・九二八)或いは、「旅の宿り」(6・九三〇)に、「沖つ鳥 味経の原に もののふの 八十伴の男は 廬りして 都なしたり」(6・九二八)と、「都」の成立が見出されていることが着目される。もちろん、第一反歌が「大君の敷きます時は都となりぬ」と表すように、一時的にでも、「大君」がそこに存在することが都となりえる条件となっている。

一〇六二番歌の「大君」に聖武天皇の姿を捉えたと、「あり通ふ」のは、九二八(三〇)番歌が表す神亀二年(七二七)に、はじめが求められる。

『続日本紀』は、翌神亀三年(七二六)十月七日条に播磨国への行幸を記す中、十九日条には、

癸亥、行、還りて難波宮に至りたまふ。

との記事が見出される。二十六日条には、

庚午、式部卿従三位藤原宇合を知造難波宮事とす。

と、藤原宇合が知造難波宮事に任ぜられ、難波の宮の改修がはじめられる。工事が進められる間にも、難波宮行幸があったことは、当該巻が神亀五年(七二八)のこととして、

五年戊辰、難波宮に幸せる時に作る歌四首

大君の境ひたまふと山守据ゑ守るといふ山に入らずは止まじ (6・九五〇)

見渡せば近きものから岩隠りかがよふ玉を取らずは止まじ (6・九五二)

韓衣着奈良の里のつま松に玉をし付けむ良き人もがも (6・九五三)

さ雄鹿の鳴くなる山を越え行かむ日だにや君がはた逢はざらむ (6・九五三)

右、笠朝臣金村が歌の中に出でたり。或は云はく、車持朝臣千年が作なり、といふ。

右、笠朝臣金村が歌の中に出でたり。或は云はく、車持朝臣千年が作なり、といふ。

と表される。

『続日本紀』天平四年（七三二）三月二十六日条には、

己巳、知造難波宮事從三位藤原朝臣宇合ら己下、仕丁己上、物賜ふこと各差有り。

と、難波宮の改修が終えられた様子がかがわれる。その成果は『万葉集にも、

式部卿藤原宇合卿、難波の都を改め造らしめらるる時に作る歌一首

昔こそ難波みなかと言はれけめ今は都引き都びにけり（3・三二二）と見出される。「今は都引き都びにけり」との表現に留まるのは、聖武天皇の到着が待たれているためであろう。

『続日本紀』に記録されているだけでも、聖武天皇の難波宮行幸は、

天平六年（七三四）三月十日～十九日

天平十二年（七四〇）二月七日～十九日

と繰り返されている。その先に、天平十六年（七四四）閏一月十一日から行幸があり、皇都となる勅が出された。

⑤の作歌時期を特定することは難しいのだが⁽¹⁴⁾、「やすみしし 我が大君の あり通ふ 難波の宮は」との表現の先に皇都への勅を捉えらると、聖武天皇のそれまでの行幸が回顧され、讚美され詠まれている可能性が考えられる。

平城京還都後に詠まれた④より後に置かれることは、難波宮がその後も皇都としての機能を継続していることを意味する。⑤の「あり通ふ」は、天皇が難波宮に行幸する度に、その意味が確認される表現として機能し続けることになる。⑤の作歌が、天平十七年以後にも見出される理由にもなる。

⑤は、当該巻の冒頭部に配置された九二八～三〇に端を発する難波宮の

皇都計画が、天平十六年に結実することを祝して詠まれている。平城京還都後に詠まれた④より後に配置されることで、廃都ではなく、皇都としての機能が継続することが讃えられているように捉えられる。

三、巻末歌の役割一

⑤には難波宮の、皇都としての機能の継続が讃えられていることを述べた。巻末歌はその後に記されている。

⑦ 敏馬の浦に過る時に作る歌一首 并せて短歌

八千樺の 神の御代より 百船の 泊つる泊まりと 八島国 百船人の 定めてし 敏馬の浦は 朝風に 浦波騒ぎ 夕波に 玉藻は来寄る 白砂 清き浜辺は 行き帰り 見れども飽かず うべしこそ 見る人ごとくに 語り継ぎ しひけらしき 百代経て しのはえ行かむ 清き白浜

反歌二首

まそ鏡敏馬の浦は百船の過ぎて行くべき浜ならなくに

浜清み浦うるはしみ神代より千船の泊つる大和太の浜（6・一〇六七）

右の二十一首、田辺福麻呂が歌集の中に出でたり。

題詞に「敏馬の浦に過る時に作る歌」とあることに留意すると、歌の内容から、船の起点は「難波」にある。長歌は羈旅の途中に見出された「敏馬」が、八千樺の神の時代から多くの船の停泊する湊であり、国中の船人たちがそう定めてきた浦であると位置づける。朝風に浦波が立ち騒ぎ、夕波に玉藻が寄って来る。白砂の清らかな浜辺は、行きに帰りにも飽きはないと愛でられている。見る人が誰でも語り継いで、万代の後にまで偲び行くのだろうと、清らかな白い浜辺の景が讃えられている。第一反歌では、敏馬の浦は、多くの船が素通りして行くような浜ではないのに、自分たちの船は通り過ぎようとしていることを惜しむ。第二反歌は、浜が清

く浦も立派なので、神代の時からたくさん船が停泊した大和太の浜であると讃えられている。

題詞の「敏馬の浦に過る時」に想起されるのは、当該巻の冒頭部（九〇七～九四七）に次の歌であらう。

敏馬の浦に過る時に、山部宿禰赤人が作る歌一首 并せて短歌

御食向かふ 淡路の島に 直向かふ 敏馬の浦の 沖辺には 深海松
採り 浦廻には なのりそ刈る 深海松の 見まく欲しけど なのり
その 己が名惜しみ 間使ひも 遣らずて我は 生けりともなし

反歌一首 （六・九四六）

須磨の海人の塩焼き衣のなればか一日も君を忘れて思はむ

（六・九四七）

右、作歌の年月未だ詳らかならず。ただし、類を以ての故に、この次に載せたり。

長歌は、淡路の島と真向かいの敏馬の浦の沖には深海松を採り、浦にはなのりそを刈っている。その深海松を見るように一目見たいと思うが、なのりそのように我が名惜しさに、使いの者を遣らないでいる私は、生きた心地もしないことだと旅の心情が表される。続く反歌は、須磨の海人の塩焼き衣のように着慣れてしまったら、一日でも君を忘れることができようか、できはしまいと、その思いを繰り返す。赤人歌が敏馬の浦に「深海松」や「なのりそ」を見出せば、⑥には玉藻が寄せる清らかな「浜辺」や「白砂」の美しさが讃えられている。

「類を以て故ち」と記された左注に留意すると、九四六～四七番歌は、

三年丙寅秋九月十五日、幸於播磨国印南野時、笠朝臣金村作歌一首
并短歌
山部宿禰赤人作歌一首 并短歌
（六・九三五～九三七）

過辛荷嶋時、山部宿禰赤人作歌一首 并短歌
（六・九四二～九四五）

過敏馬浦時、山部宿禰赤人作歌一首 并短歌 （六・九四六～九四七）

右、作歌年月未詳也。但以類故載於此次。

の一群の中に収められていることが着目される。その直前の一群が、冬十月、幸于難波宮時、笠朝臣金村作歌一首 并短歌

（六・九二八～九三〇）

車持朝臣千年作歌一首 并短歌
（六・九三一～九三二）

山部宿禰赤人作歌一首 并短歌
（六・九三三～九三四）

となる。当該巻の冒頭部はこれらの歌で結ばれている。⑤⑥は、その後を引き受けられるように配置される。冒頭部が、聖武天皇の行幸歌を中心に整理されているのに対し、末尾部は聖武天皇によって展開された遷都の先に⑤の難波宮が皇都として位置づけられる。そこからの出立する羈旅が、⑥に途中の敏馬浦を讃美することによって予祝されている。土地褒めが、聖武朝の治世をも言祝ぐ表現として選ばれ、巻が閉じられていると考えられる。

四、巻末歌の役割二

皇都としての機能を継続する難波宮にはじまる羈旅歌が、敏馬浦を讃えることで、聖武朝の繁栄をも予祝していることを述べた。

巻末歌が羈旅歌をもって閉じられていることを、改めて『万葉集』二十卷の中に俯瞰してみよう。

例えば、当該巻の次に配置される巻七の「雑歌」に着目してみると、

吉野にして作る （七・一一三〇～一一三四）
山背にして作る （七・一一三五～一一三九）
摂津にして作る （七・一一四〇～一一六〇）
羈旅にして作る （七・一一六一～一二五〇）

は、羈旅歌が群として整理されている。羈旅歌は五畿七道に広がりを見せ、

そこを往来する人々の心情が多様に表現されている⁽¹⁵⁾。羈旅の心情に着目すると巻十二には、「羈旅発思」(12・三一七〜三二七九)と、新たな分類による歌の整理も試みられている。当該巻末部が閉じ目とする羈旅歌には、新たな歌世界を切り開いてゆく可能性が示されている⁽¹⁶⁾。

当該巻の時間を少し巻き戻す中には、巻十五が、

天平八年丙子の夏の六月に、使を新羅の国に遣はす時に、使人等、おのおの別れを悲しびて贈答し、また海路の上にして旅を働み思ひを陳べて作る歌、并せて所に当りて誦詠する古歌 一百四十五首 (三五七八〜三七二八)

中臣朝臣宅守、蔵部の女孀狭野弟上娘子を娶りし時に、勅して流罪に断じ越前国に配す。ここに夫婦別れやすく会ひ難きこと相嘆きて、各働情を陳べ、贈答する歌六十三首 (三七二三〜三七七九)

と、二つの出来事に基づいた羈旅歌の世界を表している。当該巻末部の最後に置かれた⑥が羈旅歌であったことは、聖武天皇を中心とすることを理想とする古代律令社会の中で、官人たちにとって、果たすべき任の大きな役割の一つであったことを表している。それが歌世界として、多様に展開される様子を、後の巻に読むことができる。当該巻末歌は、その先駆けを表すように編まれている。

⑥が敏馬浦を過ぎた先を示すことなく巻を閉じていることに留意すると、無事な帰京が求められる。例えば、巻十五の前半に見出された遣新羅使人等の歌の中には、

筑紫を廻り来、海路にて京に入らむとし、播磨国の家島に至りし時に作る歌五首

家島は名にこそありけれ海原を我が恋ひ来つる妹もあらなくに

(15・三七二八)

草枕旅に久しくあらめらと妹に言ひしを年の経ぬらく

我妹子を行きてはや見む淡路島雲居に見えぬ家付くらしも (15・三七一九)

ぬばたまの夜明かしも船は漕ぎ行かな三津の浜松待ち恋ひぬらむ (15・三七二〇)

大伴の三津の泊まりに船泊てて龍田の山をいつか越え行かむ (15・三七二二)

を読むことができる。

時間軸を巻き戻すように配置された巻十七の冒頭部は、太宰府からの帰途を詠む次の歌にはじまる。

天平二年庚午の冬十一月、大宰帥大伴卿、大納言に任せられ帥を兼ねること旧のごとし、京に上る時に、僊従等別に海路を取りて京に入る。ここに羈旅を悲傷し、各所心を陳べて作る歌十首

我が背子を我が松原よ見渡せば海人娘子ども玉藻刈る見ゆ

右の一首、三野連石守作る。 (17・三八九〇)

荒津の海潮干潮満ち時はあれどいづれの時か我が恋ひざらむ

(17・三八九一)

磯ごとに海人の釣舟泊てにけり我が舟泊てむ磯の知らなく

(17・三八九二)

昨日こそ舟出はせしかいさなとり比治奇の灘を今日見つるかも

(17・三八九三)

淡路島門渡る舟の梶間にも我は忘れず家をしそ思ふ

(17・三八九四)

たまはやす武庫の渡りに天伝ふ日の暮れ行けば家をしそ思ふ

(17・三八九五)

家にてもたゆたふ命波の上に浮きてし居れば奥か知らずも

大き海の奥かも知らず行く我をいつ来まさむと問ひし児らはも

(17・三八九七)

大舟の上にし居れば天雲のたどきも知らず歌乞我が背

(17・三八九八)

海人娘子いざり焚く火のおぼほしく都努の松原思ほゆるかも

右の九首の作者、姓名を審らかにせず。(17・三八九九)

卷十七の冒頭部が時間を巻き戻してそれ以前の巻を回顧していることに鑑みると、当該巻末尾部⑥に配置された羈旅歌の行方が、ここに帰京を詠む歌によって応えられている姿を認めることができる。筑紫からの無事な帰京を詠む歌にはじまることで、聖武朝が末四巻に引き継がれてゆくことを構想している可能性が見出されよう。

おわりに

当該巻末部は、それ以前に記された歌の時間を少し巻き戻すような形で、久邇京への遷都が、聖武朝の大きな節目であったことを表している。①②③には、旧都となる平城京に哀惜の情が捧げられ、久邇に誕生した新京が讃えられていた。

とはいえ、新たな時代の到来が期待された久邇京も、時代の移りゆく中で廃都されることが惜しまれてゆく。荒れてゆく久邇京を惜しむ歌は、難波宮が皇都として宣言されたために詠まれたものではない。平城京への還幸によるものであった。④には、天平十七年以後の作歌が考えられる。配列からは⑤にはそれ以後の作歌時期が想定されそうだが、聖武天皇が「あり通ふ」姿は、神亀二年から見えはじめ、難波宮が皇都となる経緯を回顧するように讃えられていることに鑑みると、天平十六年までには詠まれていたであろう。④の後に置かれることで、平城京に還幸した後も、難

波宮は皇都として機能していることが示されている。難波から出立する羈旅歌は、敏馬の浦を讃えることで、聖武朝の治世を讃美して閉じられている。当該巻の冒頭部の行幸歌群と呼応するように巻がまとめられることを確認した。

当該巻の最終歌が行幸歌ではなく羈旅歌で閉じられていることを、二巻の中に俯瞰してみると、作歌年次を明記しないことの意味は小さくない。続く巻七は、作歌事情をも削ぎ落とした羈旅歌群によって、五畿七道に広がる歌世界が展開されている。巻十二には、「羈旅発思」と心情に立ち入る新たな分類も試みられている。

当該巻が表す時間を少し巻き戻す中に起きた出来事を、巻十五に読むことができる。

⑥の羈旅の行方を探ると、巻十七の巻頭が太宰府からの帰京にはじまることが留意される。聖武天皇代の歌世界が当該巻末部を介して、末四巻へと引き継がれるように結ばれていることを見通した。

注

(1) 例えば、巻二十の巻末部については、市瀬雅之「『万葉集』に表現された編纂者『大伴家持』―巻二十の末尾三十一首の考察を起点として―」(『中京大学 文学会論叢』第四号 二〇一八年三月)と市瀬雅之「詠まれた時点で歌の解釈を考える―天平勝宝九歳・天平宝字元年を中心にして―」(二〇一九年十月『美夫君志』第九十九号)を踏まえて、市瀬雅之「天平宝字三年以後の家持―薩摩守赴任以前を考える―」(二〇二三年(令和五)四月『美夫君志』第一〇六号)を示した。

(2) 巻六の編集については、既に市瀬雅之 a 「編纂者への視点―巻六の場合―」(『大伴家持論―文学と氏族伝統―』桜楓社 一九九七

- 年五月)・市瀬雅之b「家持の編纂意識」(おうふう 平成一九年三月、初出二〇〇四年七月)・市瀬雅之c「巻六の場合」(市瀬雅之・城崎陽子・村瀬憲夫『万葉集編纂構想論』笠間書院 二〇一四年二月、初出二〇〇九年十二月)を示している。本稿は、その先に論じ残した巻末部に焦点を当てた考察となる。
- (3) 吉井巖「万葉集巻六について―題詞を中心とした考察―」『万葉集への視角』和泉書院 一九九〇年十月、初出一九八一年十一月
- (4) 前掲(2)市瀬aに同じ。
- (5) 村瀬憲夫「万葉集巻六末部の編纂と大伴家持」『大伴家持論 作品と編纂』塙書房 二〇二二年九月、初出二〇〇八年五月
- (6) 前掲(2)市瀬abに同じ。
- (7) 松田聡「万葉集巻六と天平十六年―末四巻を視野に―」『岡山大学国語研究』三十四巻 二〇二〇年三月
- (8) 前掲(2)市瀬cに同じ。
- (9) 前掲(8)に同じ。
- (10) いずれにも、内舎人であった大伴家持の歌が中心に採用されているところに特徴が認められる。大伴家持は、作者としてばかりでなく、編集者としての痕跡を色濃く残している。
- (11) 市瀬雅之「題詞と左注の位相―巻一の場合―」前掲(2)b、初出一九九八年三月
- (12) 小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳 新編日本古典文学全集『万葉集』②(小学館 一九九五年四月)
- (13) 伊藤博『万葉集積注』三集英社 一九九六年五月
- (14) 松田前掲(7)に整理されている。
- (15) 村瀬憲夫『万葉集編纂の研究 作者未詳歌巻の論』塙書房 二〇〇二年六月
- (16) 城崎陽子「『羈旅』という部類と編纂」市瀬雅之・城崎陽子・村瀬憲夫『万葉集編纂構想論』笠間書院 二〇一四年二月、初出二〇〇九年十二月、初出二〇一二年一月
- 本稿が引用する『万葉集』は、小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳 新編日本古典文学全集(一九九四年五月〜一九九六年八月 小学館)をテキストにしている。
- 本稿が引用する『続日本紀』は、青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸校注 新日本古典文学大系『続日本紀』二〜三(一九九〇年九月〜一九九二年十一月 岩波書店)をテキストにしている。
- 本稿は、二〇二二年度梅花女子大学研究助の成果の一部である。